

2025年4月13日 第二礼拝

説教題「神であることを捨てる奇跡」マルコによる福音書15章1～15節

主任牧師 加藤 誠

**「群衆はますます激しく、『十字架につける』と叫び立てた。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。」(マルコ15:14-15)**

福音書を読んでいて不思議に思うことは、エルサレムの都に入る前と後の主イエスの変わりようです。エルサレムに来る前までは、病の人を癒し、死んだ者を生き返らせ、五千人を超える人たちをわずかなパンで満腹にし、嵐の湖を静め、湖の上を歩かれた力強い「神の子」。その主イエスが、エルサレムに入るやパタッと奇跡的な力を用いることを止めて、反対者たちの「なすがまま」にされていく。

なぜ主イエスは変わられたのか。実は本質的な主イエスの姿勢は変わっていないとわたしは受け止めています。主イエスとその宣教で第一義的に伝えられたのは「神の愛」でした。どんな状況でもどんな人にも注がれている、神の憐れみと赦し、決して変わることはない真実の愛。この愛を伝えることに主イエスは全力を注がれました。

マルコ2章「中風の人をいやす場面」で、主イエスは「『罪は赦された』と言うのと『床を担いで歩け』と言うのとどちらがやさしいか。人の子が罪を赦す権威をもっていることを知らせよう」と言って中風の男を癒されていますが、主イエスにとっては「罪を赦す愛の神を伝えること」が第一義であり「癒し」は第二義のことでした。

「癒し」が第一義になるところでは、人は「癒しだけ」を求める。「癒されたら大喜び。癒されないとガッカリ」になってしまう。そうではない。「癒されることもあるし、癒されないこともある。それは人間には計り知れない神の選び。たとえ癒されなくても神は愛である。その神の愛を信じていくところに人間の幸いがある!」。この第一義的な「神の愛」を主イエスは伝えられたのです。

この「真実の神の愛」を伝える主イエスの宣教の最終的な答えが十字架でした。どんな状況でもどんな人でも、愛し、赦し、祈り続けてくださっている愛の神。たとえ人が願う癒しが起こらなくても、たとえ人が願う勝利や恵みが目に見える形で実現しなくても神の真実な愛は変わらない。その神の愛を私たちに伝えるために、主イエスは神の御心に従って奇跡的な力を一切捨てられました。神であることを捨てて人間の不条理な死を死んでいくことこそ、新の奇跡であり、それが十字架の道だったのです。

最初から最後まで神の意思に従う。この主イエスの姿勢は荒野でのサタンとの闘いに示されています。サタンは主イエスに「メシアになるな」と誘惑したのではありません。「お前の名前がほめたたえられるメシアになれ!」と誘惑したのです。しかし主イエスはその誘惑を退けて「神の御名がほめたたえられ、神の御心になることを求めるメシア」として、自分を捨て、ただ神に仕え、人々に仕えるメシアとして歩む

ことを選び取られました。主イエスは自分に託された奇跡的な力は「神の名がたたえられるためだけに使い、自分の名がほめたたえられ、自分の命を救うためには使うまい」と心に決めてその働きを始められました。それゆえ、エルサレムでは、奇跡的な力をもって、自分を憎み殺そうとする人たちをギャフンと言わせ、自分の前にひれ伏させることはなさらなかった。自分がほめたたえられることを捨て、神の御名があがめられることを求めた歩みの帰結が十字架だったのです。

さて今朝の場面は主イエスがローマ総督のピラトの尋問を受ける場面ですが、この場面で考えさせられること。それは「ほんものの力、強さとは何か」ということです。ユダヤを統治する最高責任者であるローマ総督ピラトはこの場面で一番大きな力を持っている男でした。しかし彼の心の中には常に恐れがありました。彼の地位はローマ皇帝の手中にあり、民衆の暴動が起きようものならすぐに左遷させられる悲しい立場だったのです。実際ピラトはこの数年後にサマリアで起こった暴動の責任を問われてローマに召喚され自殺したと伝えられています。この時もユダヤの民衆を機嫌を損ねることを恐れたのでしょう。ピラト自身は「イエスに死罪の理由を見出せない」と判断したにも関わらず、民衆を恐れ、神の前に正しいと思うことを貫くことができませんでした。人間の権力では、ほんとうの安らぎを得ることはできません。人間の権力は常に不安と恐れを抱えているものなのです。

では「ほんものの力、強さ」とはなんでしょうか。主イエスは弟子たちに言われました。「人々を恐れてはならない。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」と。「何を言おうかと心配するな。語るべきことは聖霊が教えてくださる」。人を恐れるのではなく、神を恐れる。神の前に正しくあることを願い、聖霊の導きを求める時、ほんとうの勇氣と力は与えられるのです。「ほんとうの力と強さ」は、その人が持っている社会的な力、権力、パワーのことではありません。「神から与えられる力と強さ」のことなのです。

「イエスが何もお答えにならなかったので、ピラトは不思議に思った」（5節）。ピラトにとって、自分を十字架につけようと罵詈雑言、ありとあらゆる非難の言葉を聞きながら、何も弁明しようとしないうイエスの姿は理解できなかったようです。しかし主イエスの心は愛なる神によって守られていました。ヨハネ福音書の同じ場面では主イエスが「わたしは真理について証しするために生まれた」と言うと、ピラトが「真理とは何か？」とつぶやきます。この言葉は「真理なんてものがほんとうにあるのか？」とも訳せるそうです。主イエスはその生涯を通して、何よりその十字架を通して示された真理とは、どんな状況でも、どんな私たちをも、愛してくださる神の愛です。この真実の愛を私たちに届けるために私たちの間を生き、十字架の道を歩まれた方に従っていく信仰を、今週もまた新たに頂いてきましょう。